

第2回「かごしまの先生」魅力発信検討委員会における主な意見について

【日 時】 令和6年10月21日（月）午後1時～午後3時10分

【場 所】 自治会館403号室

【参加者】 委員8人 学生7人 事務局8人

1 委員と学生との意見交換会（午後1時～午後2時20分）

(1) 学生からの意見

ア 教職の魅力

- ・ 子どもたちの成長を身近に感じることができることや、多くの人とかかわることが自分の成長につながる。
- ・ 児童、先生方、地域の方々など、いろいろな方々と関係をもつことで、自分の知見を広げることができる。
- ・ 異動があるからこそ、離島も含めたそれぞれの地域の教育や文化に触れることができる。

イ 教職に期待することや不安

- ・ 教育実習で、児童主体の授業を構成する難しさを感じた。また、ICT活用の技術も足りないと感じて、総合教育センターの研修にも参加した。
- ・ 周囲から「教員は大変そう」と言われるが、「大変だけど、教師っていいよね。」と憧れられる存在になりたい。
- ・ 教員が児童のことを最優先で考えることができる環境を作っていただきたい。
- ・ 教職は保護者対応も含めて業務内容が多いため、教材研究をする時間がないのではないかな。
- ・ 現在、部活動の外部指導員を行っているが、教員と外部指導員との連携や指導の分担方法など、難しさを感じている。技術的な指導は外部指導員が行い、学校生活における指導や諸手続は教員が行うなど、はっきりと分担させればよいと思う。
- ・ 部活動の指導を含めた多くの業務を担いながら、ワークライフバランスの充実を行うことができるか不安。
- ・ 離島教育や複式学級教育について、学生のうちにもっと学びたい。

ウ その他（自由意見）

- ・ 教員である親の影響で、転校を何度も経験した。人間関係作りに苦労したこともあったが、先生方が寄り添ってくれた。自分もそのような教員を目指したい。
- ・ 実際に働いている先生方ともっと交流できる場を設けていただき、現場の声を聞いてみたい。
- ・ 大学を超えて、教職を目指す学生間で交流の場があればありがたい。
- ・ 採用試験を合格した短大生が4年制大学への編入を希望する場合にも、大学院特例と同様の猶予を認められるようにならないか。

(2) 委員からの感想等

- ・ 前回の委員会でも、教師が魅力的な仕事であるとわかったが、今回、学生の素晴らしい熱意も共有することができて良かった。

- ・ 教員は人気がないことが課題と聞いていたが、学生の前向きな意見を聞くことができ、頼もしく感じた。我々の方が世間のイメージに惑わされているのではないかと思った。
- ・ 世間からは、教職に対して良くないイメージも持たれているが、教職ほど福利厚生がしっかりとしている職業はないと思っている。1年目から担任になり、いきなり完璧を求められることもあるだろうが、相談できる先輩や仲間を作ってほしい。
- ・ 教員は世間から厳しい目で見られるが、それでも教職を目指す意欲を大事にしてほしい。学生の意見を聞いて、採用試験の受験倍率は下がっているが、採用者の質は下がっていないと感じた。自信をもって教職に就いてほしい。
- ・ 保護者から受ける相談などは、時間のかかることもあるが、誠実に対応しなければならない大事な業務である。不安も感じるだろうが、研修制度も変化し、自分の特性に応じた研修を計画的に受講できるので、上手く活用してほしい。
- ・ 社会の価値観が多様化して、マニュアルどおりにはいかないだろうが、多くの学校で先生方が組織として一丸となった学校づくりに取り組まれている。不安もあるだろうが、安心して教師の仕事に飛び込んでほしい。
- ・ 部活動の地域移行で、学校職員と外部指導員との関係性について、理想形をどのように考えるか。問題点も多く、望ましい形の活動ができるまで、まだまだ時間がかかるのではと思っている。
- ・ ICTの活用について、若い世代も不安をもっていることは意外であった。
- ・ 学生のうちに、離島教育に触れたり、学校の運動会や文化祭に参加したりする機会を与えることを検討できないか。

2 委員による協議（午後2時30分～午後3時10分）

(1) 学生の意見を踏まえた委員からの意見

- ・ デジタルへの対応、ワークライフバランス、保護者対応、離島教育や複式学級教育への対応など、学生の教職に対する不安がわかった。県教育委員会や県内の大学、短大がチームを組んで教員を養成するコンソーシアムを作ることはできないか。
- ・ まずは管理職層の教育が必要と考える。これまでの文化が変わらない限りは、思いのある若者が教職に就いてもつらい思いをするのではないか。
- ・ 先生方が結婚や出産、親の介護等、どうやって自分の時間を確保しながら家庭を守っているのか、どのようなキャリアプランをもって今に至っているのかを、学生のうちから知ることができれば備えもできるのではないか。
- ・ 離島の学校で複式学級の授業を見る機会があったが、子どもたち一人一人の個性を生かした素晴らしい教育が行われていると感じた。離島教育に不安を感じている学生は、ぜひ離島の学びを体感する機会を作って、将来、それを子どもたちへ還元していただきたい。
- ・ ICT活用に対して、大学等での学びの機会が少ないことに驚いた。教えてもらっていないことをいきなり現場で実践するのが難しいのは明らかで、大学等はサポート体制を整えた方がよい。
- ・ 採用後は、誰でも相談できたり、同じ内容を学ぶことができたりするように、オンライン研修のようなICTを活用した体制づくりも必要ではないか。
- ・ 今後は型にはまった、教え込むような研修ばかりではなく、新任の先生方どうしで自由

に話ができたり、互いの悩みを打ち明けたりするような研修の場を設けることも、行政は検討する必要があるのではないか。

- ・ 長期休業を含めた教育課程全体を見直すことで、先生方が子どもたちの話を聞いたり、子どもたちと語り合ったりする時間を増やすことができるのではないか。
- ・ 教職員の福利厚生面については周知を行い、教職の魅力の一つとして発信すべきである。

(2) その他

- ・ 不安を解消するためにも、部活動の位置づけ等は明確に説明した方がよいと考える。
- ・ 各教育委員会でICTや生徒指導、特別支援教育等に関する専門スタッフとして、役職定年をした管理職を配置できないか。そのようなスタッフが初任の先生をサポートすることで、つまづきを減らし、トラブルを最小限にとどめ、先生方自身の時間確保につながるのではないか。中教審答申にもある「チーム学校」，「個業から協働」という考え方，組織づくりの推進も魅力に入れていければと考える。
- ・ ICT活用に関して、民間会社でも、子ども向けのボランティア講座を開催しているし、大学とともにプログラミングのコンテストも開催している。学校内部だけでなく、民間とも連携して取り組んでいることもアピールしたい。校内研修等も機会があれば行いたいと考えている。